

井上円了と東アジア(二)

井上円了の台湾巡講日誌

三浦節夫

miura setsuo

1 これまでの研究

明治二十七(一八九四)年の日清戦争の結果、台湾は清朝(当時の中国)から日本に割譲された。明治二十八(一八九五)年から昭和二十(一九四五)年まで、台湾は日本によって統治された。

井上円了は、明治四十四(一九一〇)年に台湾を巡回講演した(以下、台湾巡講と略す)。この時期は、日本統治の初期段階であった。円了は一月八日に日本を出発し、十二日に台湾の基隆に上陸し、台北、台中、台南の主要都市で講演を行い、二月十八日に基隆から帰途につき、二十一日に日本に帰国した。この三十八日間の巡講日誌を「台湾紀行」と題して残している(1)。

円了の台湾巡講については、すでに二つの研究論文がある。斎藤秋男の「井上円了の中国巡講」(2)と、野間信幸の「井上円了の「台湾紀行」」(3)である。斎藤の論文は題名から分かるように、円了の中国巡講の一部として、台湾巡講を分析したものである。これに対して、野間の論文は「台湾紀行」を詳細に検討したものである。

斎藤の論文の特徴は、円了以外の人による台湾に関する記述の紹介にある。はじめに児童文学者の坪田譲治の

「わたしの外国観」を、つぎに台湾で育った戦後文学の作家である埴谷雄高が大岡昇平との対談の中で語った当時の台湾について、最後に武者小路実篤の「八百人の死刑」から、それぞれ引用して、円了の台湾巡講における意義や見方と対比させていることである。

斎藤は、円了の「台湾紀行」における「台湾人」の風俗・習慣の関心を取り上げ、中でも「纏足」に関するところで、「これは日本の有識者がしばしば論じてきたところである。纏足をめぐる中国社会の深層にまでは、観察・思索はとどいていないにせよ、円了の纏足『天刑』論、纏足『禁止』の批判・提言は、『異文化』接触における一定の見解とすべきであろう」(4)と評価している。

これに対して、紀行文中の「蕃界」「蕃地」の記述については、円了が「生蕃を含む島民を同化(↓)『皇民』(化)するための方策いかん」(5)という方向で考え、それには信仰されている儒教崇拜を、他の宗教によって変えることが最良としているのが、円了の「信念」であると指摘している。

野間の論文の特徴は、円了の巡講の歴史的背景から始まり、円了による風俗などの現地生活観察までを詳しく検討していることである。当時の台湾は、日本の統治下になってから十五年が経過していた。円了は三十八日間かけて台湾をほぼ一周したが、第一として野間は、円了の講演について「のべ五十七席(回)の講演を行っており、そのために訪れた地域は、九庁二十七町村(二十街七庄)の三十三ヶ所に及んだ」(6)ことを明らかにし、それをつぎのように地図にまとめている。

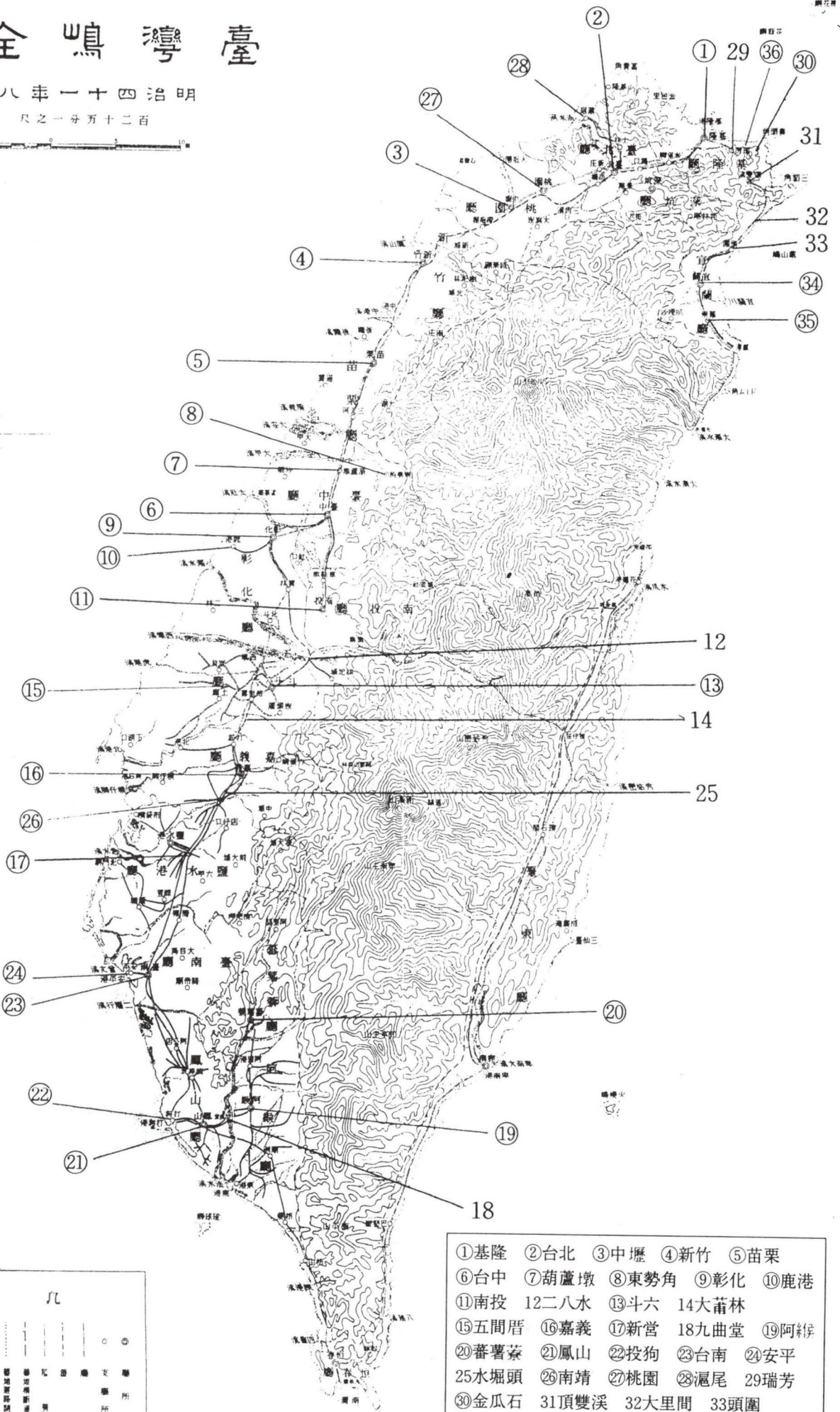
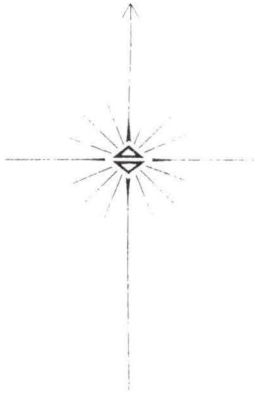
野間は、「二、円了の訪れた台湾」の項目で、台湾の植民地化の歴史をたどり、「円了が訪台した明治四十四年のころは、日本の統治と経営がようやく軌道に乗りはじめた時期であったといえよう。しかし島内を駆け巡った彼の旅は、身の安全が高い確率で保証されていたとはけっして思えない。日本の統治に対する積年の反発に加え、

井上円了台湾巡講図

臺灣全圖

明治四十四年八月

二百五十分之一



- ①基隆 ②台北 ③中壢 ④新竹 ⑤苗栗
 - ⑥台中 ⑦葫蘆墩 ⑧東勢角 ⑨彰化 ⑩鹿港
 - ⑪南投 ⑫二八水 ⑬斗六 ⑭大莆林
 - ⑮五間厝 ⑯嘉義 ⑰新營 ⑱九曲堂 ⑲阿緝
 - ⑳蕃薯寮 ㉑鳳山 ㉒投狗 ㉓台南 ㉔安平
 - ㉕水堀頭 ㉖南靖 ㉗桃園 ㉘滬尾 ㉙瑞芳
 - ㉚金瓜石 ㉛頂雙溪 ㉜大里間 ㉝頭圍
 - ㉞宜蘭 ㉟羅東 ㊱焮仔寮
- (数字は巡講巡。丸囲み数字は講演地。)

例	凡
第一州廳	○
第二州廳	○
第一縣廳	○
第二縣廳	○
第一支廳	○
第二支廳	○
第一街	○
第二街	○
第一路	○
第二路	○
第一河	○
第二河	○
第一山	○
第二山	○
第一湖	○
第二湖	○
第一島	○
第二島	○
第一村	○
第二村	○
第一庄	○
第二庄	○
第一里	○
第二里	○
第一段	○
第二段	○
第一界	○
第二界	○

このころは産業の発展がもたらす社会矛盾も新たに生じており、治安がいちおう保たれていたのは都市部を中心とした地域であったとみなせるからである^{〔7〕}と指摘している。

第二として野間は、「三、円了の行跡」の「(一) 円了の訪問地」について、「一月十二日朝に基隆に上陸して以来、二月十八日午後基隆港を後にするまで、三十八日間かけて台湾を一巡している。もともと一巡といっても、東海岸は羅東どまりであり、交通手段に恵まれた現在ならば半周とすべきところである。それでも当時にあつては、これを一巡と認めても差し支えなからう^{〔8〕}と述べている。

円了の巡講はけっして容易なものではなかった。険しい山谷の行程を強行し、深夜に講演するなど、日誌に記されているとおりである。野間は、「その姿勢に、彼の台湾巡講がけっして物見遊山の片手間で行われたものではないことを、見て取れるであろう。そもそも不辨咫尺の山道を急いでまで目指した目的地が、僻地の鉾山だったのである。虚利虚名を求めての旅でなかったことは、この一事をとってみても明らかだ^{〔9〕}と分析している。

第三として野間は、「(二) 台湾における巡講」の、「① 演題について」で、後述の巡講日誌の末尾で分かるように、「詔勅及修身に関するもの」が全体の半分以上を占めているが、野間はこのことについて「詔勅及修身」という文字面からは、堅苦しい講演内容を想像してしまうが、それを説教臭く語るか、また聴衆に向かつて易しく語りかけるかは、演題によって規定されるものではないはずである。また、「詔勅及修身」によって説かれる内容も、職業倫理の確立や、家庭・社会の旧習改善に訴えるものであったならば、円了は日本の統治下に入ったばかりの台湾において、この地に近代的意識や倫理観を根付かせようとしたと考えられる^{〔10〕}と分析している（講演内容については、佐藤厚の資料紹介を参照されたい）。

第四として野間は、「② 聴衆について」で詳しく述べている。「台湾各地で円了の講演を聴講した者は、のべ一

万千八百七十人にのぼる。講演が日本語で行われたこともあり、聴衆のほとんどは内地から移住してきた日本人であったと思われる。明治四十四年の台湾の総人口は三百二十八万八千八百七十九人、そのうち内地人の人口は十万九千七百八十六人であった。内地人のうち成人は四分の三程度を占めていたので、おおむね内地人成人の七人に一人が円了の警咳に接していたことになる。これが全島に及んでいるのであるから、講演はそれなりに影響力をもったと考えられる^{〔11〕}と述べている。

第五として野間は、つぎに「四、円了の観た台湾」を「①風俗・習慣に関する観察」と「②風土・生活・産物に関する観察」に分けてまとめているが、「円了の観察眼には、まず現実があるがままに把握しようとする態度で貫かれている。それは「台湾紀行」のなかで、随所に表れているものである。そして所見を述べる場合は、彼自身の観察に基づいて行うのである^{〔12〕}と、野間は分析している。

第六として野間は、植民地の台湾を体験した円了の意識について述べている。「五、円了の台湾所感」について、円了は「島民は家あるを知りて、国あるを知らず、父母あるを知りて、君主あるを知らず」と述べているが、野間はこのことを取り上げて、「今日感覚で見れば右の分析は、台湾に住む漢民族である本島人「島民」を、愚民視していると言われかねないものである。日本の統治下においてこれに抵抗する住民の姿や、漢民族としての誇りを失わずに生きようとする者の存在を、円了は認識しなかったのかと問われてしまうかもしれない。その意味では円了もまた、宗主国の臣民としての意識から自由になっていない。……明治四十四年という時期は、大正七年六月に「第七代総督明石元二郎がいわゆる同化主義を唱えるまでは、建前の上においてさえも台湾人に対する差別は当然視されていた」状態にあり、円了の意識もその範囲内であったからである^{〔13〕}と、野間は指摘している。円了は島民の意識を変革するには宗教によるべきであると主張している。

第七として野間は、「六、紀行文としてのおもしろさ」について、「領台初期の明治四十四年に台湾をほぼ一周した記録が、当時の島内の様子を生き生きと伝えているからである。これは紀行文の骨格となっているものである。紀行文は記述内容が正確であつてこそ、読者に安心感を与えることになる。円了の場合、確かな観察眼をもつて実際に見聞したものをだけを記録しているので、創作が混在している不安はない」(14)と指摘している。

第八として野間は、「七、円了の眼差し」について、「外側から観察していた円了の足場は、徐々に台湾社会の内側近くに移動してゆき、彼の書き留める記録も、日々の活動記録を越えて、この島が内部に抱える複雑な事情を記したものになっていった。／内地人社会を巡つて講演しながらも、やがて円了の眼差しは台湾に暮らす民衆の姿をとらえるに至り、彼らの意識形態や道徳観まで視野に収めてゆくことになる。／ただし円了の視線は、山地の先住民の姿をとらえるところまでは届かなかつた。「蕃地」を遠く眺めやるだけでは、先住民への理解を深め得るはずもない。これが明治四十四年の旅の限界であろう。／ともあれこのような限界を含みながらも、井上円了の「台湾紀行」は、領台初期に当地を一巡した明治の在野知識人が遺した台湾の観察記録として、貴重な文献となつている」(15)と指摘している。

円了の台湾巡講の評価と問題点については、これまで紹介してきた二つの論文で語り尽くされると、筆者は考えている。当時の日本の植民地について、円了が台湾巡講で指摘している「近代化」の必要性の視線は宗主国の立場そのものであり、明治三十九(一九〇六)年と大正五(一九一六)年の朝鮮巡講と共通している(16)。このような歴史的な問題から、われわれはどのように学んでいくのか、筆者がこの台湾巡講の日誌を取り上げる意義はそこにある。

その点で参考になる論考として、末次弘の「日本近代化における西洋的なものと日本的なものとの葛藤」を紹

介しておきたい。末次は最近の傾向として「戦後の日本を導いてきたアメリカ型民主主義を疑問視する動きが強まり、遂に、第二次世界大戦時の日本の軍事行動を肯定する主張が公然とおこるまでになった。こうした論者はあまりにも性急に、また無批判に戦中・戦前における日本的なものに訴えている。だが、私たちはそうした方向を採るべきではない。彼らと異なる方向を見出すために、第二次の日本近代化を第一次のそれと比較すること」が必要であり、結論として、「日本的なものと西洋的なものとを固定した概念として扱うのではなく、新しい枠組みのもとに置きなおし、葛藤―対話を忍耐強く探るべきではないだろうか。」(17)と提案している。この提案は、現代の日本人が東アジアとの関係を再検討することにも通じる視点であると、筆者は考えている。

今回、円了の「台湾紀行」を現代語訳するにあたり、つぎのような編集方針で行った。

一 円了の原文については、文意を損なわない範囲で、漢字や文章を現代語に訳した。

二 原文の漢字の読み仮名については、原則としてそのままにしたが、読者の便を考慮して適宜補った。また、漢字の意味が難しいもの、文意が理解しにくいものは、編者が「」の中で説明を加えた。

三 漢詩は原文に続いて、「」の中に、現代語訳を掲載した。

四 原文の中には、今日では使用をつつしむべき差別用語が用いられているが、研究資料という観点から原則として原文のままとした。

本稿を編集するにあたり、文章の現代語訳は大橋秀明氏、漢詩の現代語訳は玉川大学リベラルアーツ学部教授の中村聡氏、台湾の用語の解説は中華民国科技部人文社会科学研究中心(客員研究員)の深川真樹氏、講演の演題は専修大学ネットワーク情報学部特任教授の佐藤厚氏、以上の方々からご協力を得た。記して感謝申し上げます。なお、文責は筆者にあることをお断りしておきます。

【註】

- (1) 井上円了「台湾紀行」(『南船北馬集』第六編、明治四十五年四月二十五日、修身教会拡張事務所) 一三—四五頁。
- (2) 齋藤秋男「井上円了の中国巡講」(『井上円了研究』第七号、一九九七年二月) 五九—七九頁。
- (3) 野間信幸「井上円了の『台湾紀行』」(『井上円了センター年報』第九号、二〇〇〇年七月) 二三一—四六頁。
- (4) 齋藤秋男「井上円了の中国巡講」、前掲書、六九頁。
- (5) 同右、七〇頁。
- (6) 野間信幸「井上円了の『台湾紀行』」、前掲書、一三三頁。
- (7) 同右、二五頁。
- (8) 同右、二七頁。
- (9) 同右、三二頁。
- (10) 同右、三三頁。
- (11) 同右、三三—三四頁。
- (12) 同右、三八頁。
- (13) 同右、三八—三九頁。
- (14) 同右、四〇頁。
- (15) 同右、四三—四四頁。
- (16) 拙稿「井上円了と東アジア(二)——井上円了の朝鮮巡講」(『井上円了センター年報』第二三号、二〇一四年九月) 八三—一二四頁。
- (17) 末次弘「日本近代化における西洋的なものと日本的なものとの葛藤」(『井上円了センター年報』第九号、二〇〇〇年七月) 一八三—一八四頁。

台湾紀行

明治四十四（一九一）年、辛亥の元旦は東京の自宅でこれを迎え、これより台湾行きの準備にかかった。元旦の拙吟が二首ある。

四十四回明治更、合邦改曆此初迎、今朝天地応揺動、万歳六千余万声、

〔明治四十四年の元旦、前年の日韓併合を受け新しい国家体制になって初めて迎える新年である、今年は社会が動いていくに違いない、日韓合わせて六千万余りの人々の万歳の声がする。〕

未尽情韓併合杯、更開樽酒祝春来、富峰古月光如雪、照得李王宮裏梅。

〔まだ日韓併合の慶びが続いているうちに、さらに樽酒を開けて迎春を祝うことになった、日本古来の月光は富士を照らしてまるで雪のようだが、あの月は新しく日本となった京城にある李王宮庭の梅をも照らすことになったのだ。〕

一月七日の午後六時に新橋を出発して、八日の午前九時に神戸三宮駅に着いた。潮田玄奘氏および岡田英定氏に迎えられて、蓬萊舎に入り、少しの間休憩の後に乗船した。随行の中野堅照氏にも、ここで会うことができた。また、東洋大学出身の吉田庄七氏も、台湾赴任のために同乗した。船の名は大坂商船会社の傑船である笠戸丸で、トン数は六千三百トン、速力は十五ノットである。正午に神戸を抜錨（船が錨を上げて出航すること）した。終日曇り晴れ。風波はないが、寒気はやや強い。

九日、曇り晴れ。朝六時に門司海峡に入った。「目がさめて起きる起きぬの戦いに、モジモジする間に門司は来にけり。」午後四時に出港して玄海〔玄界灘〕に入った。十日、同じく曇り晴れ、ただし波上は平穏である。十一日から、風はしだいに強くなった。午前十時半、信濃丸に会った。笠戸丸は新年の初航海ということで、楽隊を備えて、三度の食事ごとに奏樂があった。また、写真、講談などの設備もあった。ことに本航海から無線電信の架設があつて、船の中で新聞を発刊して乗客に配付するなど、用意周到であつた。私が同船員に贈つた一作がある。

商船笠戸大如城、遥向台湾載客行、連夜講談交落語、三時樂隊助歡迎、
已開電局伝消息、更設写真慰旅情、況復佳穀滋味在、何人不發快哉聲。

〔商船の笠戸丸は城のように大きく、船客を乗せて遥か台湾へと航海している、連夜のように講談や落語を聞くこともでき、三度の食事ごとに音楽が演奏される、船内には電信局が開設されてさまざまニュースがもたらされ、さらに写真館もあつて旅情を慰めてくれる、まして提供される食事はたいへん美味しく、誰もが快哉の声をあげている。〕

また、無線電信開設を祝つた一詩がある。

笠戸船中電局開、閃光発処響如雷、家山絶遠君休説、波上忽伝音信来。

〔笠戸丸の中には電信局が開設され、瞬間的に光ると雷のように音が響く、住まいから遠く離れてあなたはもう話し終えているだろうが、その声は海の上の私にまで伝わってくる。〕

その他、船中雑詠の二首がある。

風定檣頭夜寂寥、鎮西山外望晴霄、南溟寒月別成趣、不照梅花照暖潮。

〔海風はマストの上を緩やかに吹くだけで寂寥とした夜である、佐賀県鎮西山周辺の空は晴れ渡っている、南国の冬の月は常とは異なった趣をもっていて、梅の花を照らさずに暖かな潮の流れを照らしている。〕

船奔碧浪白雲間、四面茫茫不見山、皇国版図何処尽、大鵬程外有台湾。

〔船は青い波と白雲の間を航海し、周りは広々として山の姿も見えない、皇国の版図はどこかで終わり、鵬の行程のその外に台湾がある。〕

さきの元旦作およびこの前詩は、新年〔宮中の歌会始〕の御題「寒月照梅花」にもとづいたものである。

十二日、風雨。昨夜以来、風波は急に高く、波が甲板の上にかかることは数回に及んだ。未明に入港し、七時に上陸した。基隆街で有志者の木村久太郎氏ほか数名の歓迎を受けた。宿所は富貴閣である。斜風と凄雨〔ものさびしく降る冷たい雨〕、天気は冥濛〔うすぐらい〕として、わが内地の梅霖〔梅雨〕の気候にひとしい。寒暖も五、六月の交〔季節、時期などの変わり目〕に比べることができよう。この風雨を冒して岸の上で労役するものは、みな豚の尾の形をした結髪〔髪を結うこと、清朝の遺風の辮髪のこと〕をしている。そのために、一見するとたちまち異国にきたという思いを起こされる。

汽笛声中入海門、潮風吹雨港頭昏、基隆街外冬如夏、滿目青山我富源。

〔船の汽笛が鳴るなか港に入った、潮風が雨を吹きつけ港は暗い、基隆の街は冬なのに夏のように、視界いつばいに広がる青い山は我が国の富の源である。〕

船入台湾第一津、街頭忽見異風人、髮如豚尾君休笑、是亦神州同籍民。

〔台湾第一の港である基隆の港、街頭にすぐに異国風の人を見つけた、豚の尻尾しじぼのような髪型（辮髪）だが笑ってはいけない、彼もまた神州日本国民なのだ。〕

これは基隆の所感を述べたものである。基隆キールンはまたの名を鷓鴣籠ゲイランと称して、三面は山を負い、一面は海を抱き、実に台湾第一の良港とする。船舶の出入りが絶えるときがない。もし台北タイペイを東京に比べれば、基隆は横浜にあたるであろう。両者の距離も、前後ほとんど同じである。目下、築港の工事中である。その監督技師の川上浩二郎氏は、私とその郷里を同じくする。その夜の会場は曹洞宗久宝寺である〔この時の演題は「実業興振」及び「仏教と国家」であった。『台湾日日新報』（明治四四年一月一三日）〕。

十三日、雨。基隆滞在、夜会を開く〔この時の演題は「公德養成論」及び「未来の有無」であった。『台湾日日新報』（明治四四年一月一三日）〕。雨を冒して集まった人は堂に満ちた。当地の主催は木村久太郎氏、佐藤一景氏の兩人のだが、賛成者は支庁長の山田寅之助氏、同庁員の古田種次郎氏、木村組役員の伊藤彦太郎氏、久宝寺山主の中尾徳源氏、光尊寺山主の高橋行信氏、公益社主任の服部針夫氏、ほか三十五名の有志者である。特に、木村氏および服部氏が最も尽力してくれた。中沢慈愍氏の助力もあった。木村氏は当地で有力な鉾山の経営者である。哲学館出身の山下江村氏、花車円瑞氏、および遠縁である山本鎮三郎氏は台北より来て迎えられ、台北庁学務係長の本田茂吉氏も、教育会を代表して歓迎してくれた。

十四日、雨。基隆を去って、水返脚駅に着けば晴れとなった。この駅の前後で晴雨を異にするという。名前と内容とがつりあっているのはおもしろい。午前十時に、台北街の日之丸館に着いた。館は客室が百もあって、本島第一の大旅館とする。昼食後に佐久間総督を訪問して、ただちに小学校に至り、台湾教育会の主催になる公会に出演した〔演題は「精神修養法」であった。演説の内容は『台湾教育会雑誌』に収録されている〕。聴衆は千名以上に数えられた。非常に盛会であった。

十五日（日曜）、雨。午後、国語学校で講話をした〔演題は「心理的妖怪談」であった。演説の内容は『台湾時報』に収録されている。その他、『台湾日日新報』一昨日の東洋協会講演（明治四四年一月一七日）。その盛会は前日と同じであった。東洋協会台湾支部の主催による。会后、本田茂吉氏と車を連ねて円山公園に行き、台湾神社に参拝した〔『台湾日日新報』「台湾神社参拝」（明治四四年一月一八日）。故北白川宮殿下を奉祀〔ほうし〕神仏、祖霊などをまつること〕する所である。社殿のあたりの風光は非常に良い。

一帯黄流繞社陵、暮天含雨氣將凝、不知台北何辺在、只隔雲煙認電灯。

〔二筋の黄色い河の流れが台湾神社をめぐる、暮れなずむ空は湿気をはらんで今にも雨が降ってきそうだが、台北はどの辺にあるか分からない、ただ霧の向こうに電灯が見える。〕

帰路、花車氏に導かれて、浄土宗忠魂堂で少憩した。

十六日、曇り。午前、蕃務総長の天津麟平氏、台北庁長の井村大吉氏の宅を訪問した。民政長官の内田嘉吉氏は、在京中で不在であった。これより、大稲埕という本島人の市街を一覧して帰った。午後、赤十字病院の階上

で講話をした〔台湾日日新報〕に広告あり。愛国婦人会、将校婦人会、篤志看護婦人会連合の発起である。さらに台北医院に移り、看護婦のために一席の談話をした〔台湾日日新報〕「台北医院の精神講話（明治四四年一月一七日）。院長が不在なので、稲垣長次郎氏が代わって会主となった。

十七日、雨。午後、艫舩マカ公学校および国語学校を巡覧した。総督府編集官の小川尚義氏および本田氏が案内の労を取られた。公学校長は田中友次郎氏、国語学校教頭は大石和太郎氏である。つぎに博物館内を巡見した。船中以来の知友となった総督府技師の田代安定氏が、特に説明の労を取られた。台北開会の尽力者は本田氏、矢田由次郎氏、宮崎民次郎氏、梅山玄秀氏（臨濟宗護国禪寺住職）、小山祐全氏（真言宗弘法寺住職）、高橋醇領氏、および花車氏、山下氏などである。当時の気温は、「カ氏」六十度（セ氏零下二度）前後なので、綿衣わたぎぬ（わたいれ）を必要とした。滞在四日間、昼夜とも揮毫ヒョウゴ（書をかくこと）に忙殺された。

十八日、雨。午前台北を辞して、枋橋駅を一過した。本島第一の富豪の、林本源氏の邸宅はここにある。その公学校長である高橋貴能氏は、哲学館出身である。その次に鶯歌石と名づける小駅がある。一つの石が山腹に突き出していて、その形は鶯ウグイスに似ている。そのうえ、谷風が吹いてきてこの石に触れるときは、その声は鶯の歌うのに似ているので、その名があるという。また、枋橋付近を流れて淡水港に注ぐ長い川を、淡水河と名づけている。その兩岸は、領台当時の戦場であるという。そこで、車中吟は左のとおりである。

淡水河南駅路長、斜風細雨昼凄凉、
車窓回望堪惆悵、入眼青山旧戰場。

〔淡水河の南の駅前の道は長く、風は斜めに吹き小雨も降つてもの寂しい、汽車の車窓から周りを見ようとするとカーテンに遮られ、目に入ってくるのは青い山と旧戦場だけだ。〕

車過水駅又山亭、菜圃茶田随处青、終日不休台北雨、滿天雲氣昼冥々。

〔汽車は水辺の駅山辺の駅を過ぎて行く、野菜畑や茶畑があちこちに青々としていている、台北の雨は一日中止むことなく、空を覆った雲で昼でも暗い。〕

台湾全島（蕃地〔台湾の原住民のことを蕃と言った〕を除く）を南・北・中の三部に分けて、その主な産物を挙げれば、南部は糖〔サトウキビ〕、中部は米、北部は茶と定めることができる。そのため、北部旅行中に車窓に映ってくるものは、多くは茶園〔茶畑〕である。昼ごろ、興南庄中壠駅に着いた。支庁の所在地である。午後、衛生事務所において開演した〔この時の講演は、「戊申詔書及び教育勅語に關」するものであったという。『台湾日日新報』中壠に於ける井上博士（明治四四年一月二二日）。支庁長の志波吉太郎氏の主催による。演説後ただちに乗車して、新竹駅の塚廻家支店に入宿した。

十九日、雨、また風あり。台湾では「蘭雨竹風」と言つて、宜蘭は雨によつて知られ、新竹は風によつて名高い。あるいは「基隆雨、新竹風」とも言う。

基隆梅雨続、新竹麦風吹、内地春猶未、江山飛雪時。

〔基隆の梅雨は続き、新竹では春風が吹いている、日本内地では春はなおまだやって来ず、山も河も雪が飛ぶように降っている頃だ。〕

その夜、塚廻屋本店で、発起人諸氏と晚餐を共にして、そのうえ同所で開演した。主催は官民連合で、上田栄

助氏、浜川宇太郎氏、東恩納盛益氏、新原竜太郎氏、日向順諦氏、松本徒爾氏、橋本哲氏、真山丑三郎氏、関岡金太郎氏、村上靈順氏などの尽力があつた。村上氏は本願寺布教場に在勤している。庁長の家永泰吉郎氏は、上京中で不在であつた。この日、寒温針〔寒暖計〕は「カ氏」五十八度〔セ氏零下四度〕に下がつた。人はみな、最低の寒氣とした。

二十日、雨。新竹駅を発して、途中で故北白川宮の露宮の御遺跡を望み見て、苗栗駅に着いた。トロ車（別名は台車）に乗つて、支庁長の宇野英種氏の官邸で休憩して、午後小学校で開演した。主催は宇野氏ほか四名で、宿所は苗栗館であつた。この地は蕃界の連山を望見〔遠くから望み見ること〕して、風光に富むというのだが、雲煙〔雲とかすみ〕にとざされて、連山と対面することができなかつた。

霜風一月入台湾、光景如春客意閑、遺憾冥濛苗栗雨、街頭不見紫明山。

〔霜風が吹く一月に台湾に入ったが、台湾の景色は春のようで旅人の心は穏やかだ、残念なことに苗栗は雨で薄暗く、街から紫明山を見ることはできなかつた。〕

この付近に石油坑があると聞いた。

二十一日、晴れ。未明に苗栗を出発して、トンネルを出入りすること数回、溪山を横断して台中の平原に入った。途中で梅と桃の満開を見た。

出沒隧門知幾回、路過大甲望初開、未春天氣已清明、風自台南送暖來。

「トンネルをいくつか通過し、大甲を過ぎて初めて眺望が開けた、まだ春ではないが空はよく晴れ大気は澄み、風は台南から吹いて暖かさを送り込んで来る。」

大甲は溪の名である。内地を去つて以来、初めて天氣の清朗を迎えた。暖気も大いに加わつて、「カ氏」七十度〔セ氏八度〕に上がる。台中は中部の都会であり、官庁や公園などの規模は壮大である。午後、公学校で開演した〔この時の演題は「戊申詔書の大意」及び「教育と宗教との關係」であつた。『台湾日日新報』「井上博士講演会」(明治四四年一月二日)〕。開会の時間を知らせるのに、煙火〔花火〕をもつてされたのは、新しい意匠〔趣向〕である。主催は台中俱樂部、同教育会、同婦人会なのだが、すべて庁長の枝徳二氏、団長の小畑駒三氏の發起による。そして、学務係長の鈴木稲作氏、同属の千葉真氏が、もっぱら尽力された。また、山移定政氏、野村勘四郎氏、隅竜童氏、東大恵氏など、みな助力があつた。山下江村氏も、ここに來て一緒になつて奔走された。演説後に公園を一覽して、宿所の春田館に帰つた。旅館としては台北に次ぐ設備があつた。

二十二日(日曜)、晴れ。明けがた千葉氏とともに旅館を出発して、葫蘆墩コロトンに至つて汽車を降り、さらにトロ車〔トロッコ〕に乗つて、溪谷に沿つてさかのぼること三里、東勢角に達した。溪上は雨が少し降つて、風はやや寒さを感じた。この辺りは、有名なコロトン米の産地である。台湾人の中に、対岸の福建省方面から移住したものと、広東方面から移住したものと二種があつて、それぞれ風俗や言語を異にする。そして、この東勢角の溪上に居住するものは、みな広東人種であつて、婦人は纏足てんそく〔古く、中国で、小さく形よい足にするために、幼女の足指に布を巻きつけて、發育を抑制した風習〕をせず、よく労働や力役りきえき〔力仕事〕をする。

一道蔗雨稀往還、土車軋々入溪間、雲消漸見蒼々色、聞說是吾蕃界山。

〔一本道の周りはサトウキビばかりで雨はめつたに降らない、トロ車はゴロゴと走り溪谷の中に入って行く、雲が消えだんだんと青々とした空が見えてきた、話を聞いてみるとここが蕃族との境界の山だということだ。〕

向かい側の連山は、みな蕃地である。トロ車を降りて籃輿〔ちんよやまかご。よつでかご。竹を編んでつくった乗り物〕に乗り換え、竹橋を渡って東勢角に入った。台湾には竹を木に代用して、竹橋、竹筏、竹屋、竹柱、竹壁、竹戸などがある。また、物を担う天秤棒もみな竹で作ったものを用いる。すべて村落の民家は、竹林で家のまわりを囲む。その竹のとげがあつて、自然に城壁の役目をしている。これは、台湾の特色の一つである。東勢角の会場は公学校、休憩所は清風館で、主催は支庁長の本郷宇一郎氏、校長の鈴木豊次郎氏、布教師の藤井廓幢氏である。その夕べ、葫蘆墩を経て台中に帰宿した。東勢角でトロロを食べたので、帰路に狂歌を浮かべた。「トロに乗りトロロをたべてコロコロと、またコロトンに帰りけるかな。」

二十三日、晴れ。千葉氏とともに彰化街に移った。本島人の旧来の都会であり、街店・市場ともに賑わっている。孔子廟、天公廟、城門、公園などを巡視した。市外の山の上に砲台を築いた跡があつて、領台当時の古戦場である。孔子廟は巖然〔げんぜんおごそかで重たく、きびしい〕として存在し、広壮〔がく大きく立派なこと〕であると同時に雅麗〔がいみやびやかでうるわしい〕である。その中に公学校を併置してある。

彰化城頭路、学堂与廟連、読書声静処、隔砌拜文宣。

〔彰化の街中の道、学校と廟とが続いている、読書の声が静かに流れる所で、石畳を隔てて、孔子廟を参拝した。〕

その夕べ、仏教会館において開演した。内地人組合の主催であり、組合長の後醍院良弼氏、支庁長の中川清氏などの発起による。本願寺布教師の岡本泰道などの諸氏もまた尽力があった。寒暖計は日中〔方氏〕七十四、五度〔セ氏十二、三度〕を示した。宿所は彰化ホテルであった。

二十四日、快晴。早朝、ホテルの楼上から新高山を望むと、壯観であった。これよりトロ車に乗り、鹿港を指して行つた。里程は三里もあるが、平坦であつた。途中、トロ車の衝突が数回に及んだ。鐵路は単線なので、両方からトロ車が来て出会うときは、荷物の軽重を比較して、その軽い方が車を軌道の外に移す規定である。鹿港はむかし、対岸の中国内地との貿易の枢要地〔中心となる大切な所〕であつて、船舶の出入りが頻繁であつたが、近頃は港口が不良のために、次第に衰退の状態である。街区は異風を帯びて、店の前の通路は日よけのために、昼なお暗く、トンネルを通過するような思いがする。至る所に廟〔死者の靈を安置する堂〕が多い。すべて台湾の家屋は、紅瓦のその薄いことは煎餅せんぺいのようなもので葺ふいて、屋根の頂上の両端は上へあがつていて、ちょうど天に向かつて弓を横たえたような形をしているものは、みな廟または寺であるとする。本願寺の出張所である竜山寺も、旧来の寺院を転用している。その住職は光明智暁氏である。鹿港の会場は公学校で、主催は官民連合、休憩所は郵便局長の佐伯馨三郎氏の官舎である。そして、支庁長の村田豊次郎氏、税務支署長の島田重敏氏、専売支局長の岡本賢一氏、および佐伯氏の発起による。当所では、本島人で揮毫を所望するものが非常に多い。さらに、トロ車に乗って彰化に帰った。時に晚風がしだいに起こつた。トロ車がみな帆をかけて走るのは奇観である。また、水牛の背の上に小鳥がとまって遊ぶのもおもしろい。

甘蔗田間鐵路横、望中漸覺晚風生、懸帆土呂翻々走、載鳥水牛得々行。

〔鐵路はサトウキビ畑の中を横切つて行く、景色を眺めているとようやく夕風が吹いてきたことが分かつた、トロ車は帆をかけて飛ぶように走り、水牛は鳥を背中にテクテクと歩いて行く。〕

台湾の農家は、多く水牛に仕事をさせているが、水牛は道で日本人を見るときは、しばしば奮闘をしかけて負傷させることがある。その様子は、ちょうど敵愾心〔相手に對する憤りや憎しみから發する、強い闘争心〕を持つているようだという。彰化からふたたび汽車に転乗して、台中の春田館に帰宿して、深更まで揮毫をした。

二十五日、晴れ。台中庁下の開会は、すべて支庁長の周到な配意により、各所とも好成绩を得た。台中を去るときに、庁長および警務課長の市来半次郎氏などの見送りがあつた。トロ車で行くこと数里、富豪の林紀堂氏の宅を訪れた。主人は不在であつた。建物の中を一覽して、紅茶を一喫して去つた。千葉氏がまた同行された。路傍にサトウキビ畑が多く、村落に入れば纏足の婦人が、泥水に面して、並んで座つて洗濯をしているのを見る。目の前に蕃山が連立している。そして、雲の上にそびえているのは新高山である。

林壑高低鐵路縫、遠山近水洗吟胸、仰看天半雲如海、浮出扶桑第一山。

〔林や谷と鐵路は高くなつたり低くなつたりして続いて行く、遠い山近くの水辺が詩心を擦つてくる、中空を見ると雲は海のよう、そこに新高山が頭を出している。〕

また、水牛が列をつくつて大車を引くと、その響きがちょうど音楽を演奏するようなのは、旅中の一興となる。車行七里、午後一時に南投に着いた。会場は演武場、主催は金子恒弥氏、宮本信義氏、北沢文次郎氏、赤尾清孝

氏、矢野友之丈氏、中島常助氏などの官民有志者である。その夕べ、庁長の久保通猷氏の招待に応じて、官邸で饗応を受けた。目下、蕃社〔台湾先住民（高砂族）の部落や集団に対する日本統治時代の呼称〕の討伐最中であり、蕃地の実況談を傾聴した。帰って、南投ホテルすなわち春田館支店に投宿した。

二十六日、晴れ。南投を去ってトロ車に乗り、丘山を上下して長溪のそばを歩き、道程五里、二八水駅で汽車に転乗して、十二時半に斗六街に着いた。土地の人は男女の別なく、檳榔子〔檳榔樹の果実〕をかむために、口の中がみな赤いのは異様に感じる。この間、平原は渺茫〔広々として果てしないこと〕、沃野〔地味がよく肥えた平野〕千里、大陸的地形であって、サトウキビ製糖の中心である。気候はまた温暖で、冬時はなお気温が〔カ氏〕八十度〔セ氏十八度〕に上がることがある。エンドウマメ、チエグア〔ナス科の植物〕の類はすでに熟して、ミカンにいたっては、内地のそれと全くその味を別にする。実に天然の楽園である。また、猩々木〔ポインセチア〕と名づける異木〔珍しい樹木〕があつて、その梢の端の紅葉の、染めるような色も、内地ではまだ見ないところである。

車外冬晴暖似烘、台陽一路悉春風、猩々木末紅如染、葉々赤於霜後楓。

〔汽車の外は冬晴れでかがり火を焚いているように暖かい、台湾南部はどこに行つても春風だ、猩々木（ポインセチア）の梢は紅で染めたよう、どの葉も霜が降りた後の楓より赤い。〕

その夕べ、公学校で開演した。主催は支庁長の淵辺元治氏で、校長の高木五男氏、布教師の中島俊康氏、小関力造、奥田方叙、佐伯達二などの諸氏もまた尽力があつた。斗六製糖会社重役の松江春次氏は、船中で初めて相识〔知人〕となり、当地の開会にも大いに助力された。宿所の大和館別邸で、台湾固有の酒を試用した。これに紅

白の二種があり、一方は味酩みりんのようで、一方は焼酎に似ている。夜、雷雨があつた。

二十七日、晴れ。斗六を出発して大莆林で降車し、さらに軽便鉄道に乗つて、五間厝にある大日本製糖会社に至つた。午前中は工場内を一覧して、午後は倶楽部で休泊した。その名を新高倶楽部という。正面に新高山を対望する故である。

霜雪何辺在、三冬見碧桃、暮天雲断処、一白只新高。

〔霜や雪はどこに降るといふのだらう、冬の三か月の間に青い桃を見ることができ、暮れなずむ空雲が切れる所、新高山だけが白い。〕〔扶桑第一山〕と詠われているのは新高山のこと、現在の玉山のこと。台湾のほぼ中央部に位置する。日本統治時代、日本の富士山より標高が高いことから、「新しい日本最高峰」という意味で、明治天皇により「新高山」と名づけられた。〕

当ホテルにおいて開会して、終わつて会社の工場で演説した。土庫支庁長の岡山藤三郎氏、社員員の伊達勝作氏、同じく藤崎達磨氏、医員の高島盛夫氏などの発起である。

二十八日、晴れ。朝霧に遮られて、新高山を望見することができなかった。汽車で嘉義街に移つた。街は台北・台南に次ぐ都会であつて、阿里山の官林の鉄道の分岐点である。先年の震災以後、家屋の構造はまだ整頓されていないが、大いに将来発展の活気がある。昼夜二回、公学校において開演。その間に本願寺説教所において、仏教婦人会のために談話をした（この時の演題は、演説教育勸語大意。幽霊談。精神修養法。仏教及び国家之関係。心理的妖怪談であつた。『台湾日日新報・漢文版』大演説会（明治四四年二月一日）。旅館は嘉義ホテルである。

二十九日（日曜）、晴れ、朝霧あり。昼夜二回公学校で開演することは、前日と同じ。主催は官民連合で、嘉義

庁庶務課長の佐々木忠蔵氏、警務課長の中田直久氏、財務課長の宇都宮規矩夫氏、小学校長の小野田鎮三郎氏、公学校長の江口保氏、本願寺布教師の能美顕正氏、曹洞布教師の大野鳳洲氏、新聞記者の葦島正弥氏、小河内六一氏、和田富士夫氏など、二十八名の首唱による。庁長の津田毅一氏から、多大の配意を得た。両日とも、昼夜演説と揮毫に忙殺された。時はたまたま陰暦の大晦日で、本島人は終夜、爆竹や焼紙をして迎年を祝った。街上は囂然〔さわがしい〕としていた。

土民猶守旧、終夜祝年催、爆竹声連続、客眠驚幾回。

〔土民たちは旧の風俗を守るかのように、一晚中旧暦の越年を祝っている、爆竹の音が続き、旅人である私は何回か驚いて起きてしまった。〕

三十日（孝明天皇祭）、晴れ。ただし、雷雨が一過した。陰暦の元旦なので、本島人はみな休業した。子女が盛装をして街の路上を行き来することは、日本の正月のようである。土人は一般に、戸口の両側に、赤い紙に連句〔春聯〕を書いたものを貼付する〔はりつける〕風習であるが、毎年元旦にこれを一新するのである。その語はいずれも、金が湧き、福があふれる意味の文字を使う。土人の迷信、とくに祈福除災に関する迷信は、はなはだしいものである。嘉義を去ること数里、北港に媽祖まその廟がある。遠近から参拝に来る人が、年中絶えないという。昼食後に嘉義を出発して、新営庄で降車し、塩水港製糖会社倶楽部において開演した。支庁長の三上喜千蔵氏、会社取締役の楨哲氏、有志家の乾林三氏の発起である。楨氏は、私とその出身地を同じくする。その夜、倶楽部に宿泊した。この地方は製糖工場が最も盛んである。その実況は詩をもつて描写する。

沃野無涯望渺茫、農家一月挿秧忙、稻田断処蔗田続、煙柱凌霄是製糖。

〔耕作地は見渡す限り果てもなく続き、農家は一月なのに苗を植えるのに忙しい、稻田が終わればサトウキビの田が続き、大空を衝く煙突が見えたらそこは製糖工場である。〕

三十一日、晴れ。早朝に新宮庄を出発して、打狗で汽車を乗り換え、九曲堂から軽便鉄道に移り、河の流れが一里余の淡水溪を渡って、阿緞に着いた。時に午後二時である。屏東ホテルで一休みした後、劇場で開会した。主催は官民合同で、庁長の佐藤謙太郎氏、庶務課長の林礼蔵氏、学務係長の国谷徳太郎氏、内地人協会長の西森頼治氏、製糖工場長の藤井次六氏などの首唱による。基隆から阿緞に至った。その距離は二百六十マイル余なのだが、まだ本島の西端に達しない。ここから恒春まで、なお二十里以上ある。それによって、台湾の広闊〔広々として開けていること〕なことを知るのがよい。

台南一望野連空、車向阿緞庁下通、皇国西陲猶未達、恒春遠在白雲中。

〔台南を一望すると野は空に続くようだ、軽便鉄道は阿緞の役所に向かつて下って行く、ここでもまだ我が国の西端には達していない、恒春は遠く白雲の彼方に在る。〕

阿緞の建築物として人目を引くものは、製糖工場と病院である。病院の美しいことは、全島第一の評がある。ホテルの設備もまた良い。この日、寒暖計は〔方氏〕八十四、五度〔セ氏二十二、三度〕に上がり、盛夏の気候にひとしい。冬時の演説で発汗したのは、この地をもつて始めとする。

二月一日、晴れ。阿緞を去り、軽便鉄道に乗って、淡水溪をさかのぼり、蕃薯寮に至った。この日また、炎晴〔燃えるように暑い晴天〕であつた。

淡水溪頭路卷舒、鉄車今日換籃輿、暑如三伏何須厭、風冷檳榔樹下廬。

〔淡水溪山の道は巻いているので、今日は鉄道からボロ籠に換えた、暑さは土用のようかどうかして静めなければならない、風は檳榔樹を冷ましながら宿へと下って行く。〕

その地は溪山の間にもたがり、檳榔樹が集まって林となつている所は、実に熱帯地方の風光である。さらにこの川上をさかのぼれば、阿里山に達するという。主催は官民合同で、支庁長の成沢孝作氏、有志家の石丸長城氏が、諸事を斡旋された。休憩所は鼓山公園の別邸であつて、遠近の山の輝きと水の色は、ちょうど絵画を見ているようである。

館立鼓山旗水間、風光明媚映吾顔、誰疑此地真無比、独占台湾最勝閑。

〔今宵の宿舎は鼓山と旗水の間建っている、その地のなんと風光明媚なことか、ここが無比の風光明媚の地であることを誰も疑うことはないだろう、今宵は私が台湾随一の景勝地を独占しているのだ。〕

夜に入って演武場で開演して、旅亭水心館に宿泊した。

二日、晴れ。未明に蕃薯寮を出発して、昼ごろに鳳山に着いた。たまたま阿緞庁長の佐藤氏が、ここに来て特

に待遇してくれた。その夕べ、鳳山公館で開会した。当地の軍営〔軍隊が駐屯している所〕が残らず来聴した。主催は支庁長の河来田義一郎氏で、尾越悌輔氏、大辻愨与氏などが助力された。台南庁から三原安太郎氏が来会した。本島南部は、冬時は温暖のためにヤモリが多く、夜中に壁の上で鳴く。その声は、秋のコオロギを聞くのに似ている。これは珍しいことである。

江山到处暖煙封、柳綠花江南国冬、一夜客窓人定後、何虫唧々似秋蛩。

〔冬なのに河も山も暖かい空気に包まれている、南国の冬は柳も緑ならば花は赤く咲いている、旅館の部屋に入ってみると、何の虫だろうかコオロギと鳴いてまるでコオロギのようだ。〕

三日、晴れ。三原氏とともに打狗街に移る。宿所および会場は本願寺布教所である。夜に入って開会した。その位置は丘の上にあつて、港内を見おろすのによい。主催は支庁長の高橋伝吉氏、組合長の古賀三千人氏、布教所主任の中村顕明氏、荒本万三郎氏、大内基之輔氏、建部丑之輔氏、五十嵐平作氏などである。高橋支庁長は北海道以来の旧識であつて、五、六年ぶりに邂逅〔かいこう〕（思いがけなく出会うこと）した。打狗は南部第一の要港で、物貨の集散は基隆を凌ぐ勢いがある。目下、砂糖輸出の最中で、港内は船舶の出入りが頻繁である。

駐車打狗津頭曙、帆影濛々不知処、汽笛声中煙漸消、百船忽載砂糖去。

〔夜明け方打狗の港に車を止めた、辺りが暗くて船の帆がどこにあるか見えない、汽笛が鳴る中だんだんと霧が晴れていき、たくさんさんの船が砂糖を積んで港を出て行つた。〕

砂糖を包む菰こは香港ホンコンから購入するということであるが、その価額だけでも、毎年四十万円に上るといふ。それによつて、砂糖の産額がいかに多大であるかを知るのに十分である。

四日、晴れ。打狗を出発して、橋仔頭を過ぎて台南街に向かう。車外一望、稲田の大部分は挿秧そうおう〔田植え〕を終わっている。毎年第一回の挿秧は一月下旬、第二回は六月であると聞く。台南に着くと、数名の歓迎者に迎えられて、ただちに宿泊所である読書俱樂部に入った。室内と庭園はともに広い。これに連結する壮大な洋館は、旧知事官邸ということであるが、シロアリののために使い物にならないことになつてしまつたという。シロアリの害は恐れなければならない。昨今は台南共進会を開催中で、街頭の裝飾は人目を引き、観客がたくさん集まつて、非常に盛況であつた。当日の午前、共進会場内を見回つた。南部の物産がことごとく陳列されてゐた。來賓接待所で一休みして、曲芸を一覽して歸つた。夜に入つて、両広会館で講演をした。

五日（日曜）、晴れ。午前、京北中学出身の加藤蝦一氏、橋本味一氏、内田事氏、家永豊氏と撮影して、後に会食をした。午後、車を走らせて開山神社に登詣した。鄭成功を祭る廟である。

偶訪鄭成功、廟門古色紅、武威動千載、君亦一英雄。

〔たまたま鄭成功の廟を訪れたが、廟の門は古びて趣のある紅色であつた、彼の武士としての威光はいつまでも人々の心を動かす、永遠に台湾の英雄の一人と慕われるであらう。〕

つぎに孔子廟を拝観した。廟内に公学校を併置してある。鈴木金太郎氏はその校長である。最後に、御遺跡を参拝して所感を述べた。これは、故北白川宮殿下の御旅館の跡である。

当年遺跡在何辺、探得台南街外阡、一鳥不歌花不笑、社頭低首獨潸然。

〔その遺跡はどの辺りに在ったのだろうと探していると、台南の町の郊外奥深い所に在った、鳥の鳴き声もなく何の花も咲いておらず、神社で深く深く首をたれて威徳を偲んだことだ。〕〔陸軍第四師団長であつた北白川宮能久親王は、日清戦争によって日本に割譲された台湾征討近衛師団長として出征したが、現地でマラリヤに罹り、台南で薨去した。終焉の地に台南神社が創建された。〕

神社の主典〔禰宜の下にあつて、祭儀などを執行する〕は鈴村讓氏である。神社の後ろに博物館がある。そのほか台南には名所旧跡が多々あるけれども、時間が許さないために、いちいち見回ることができなかった。当夜の開会は、前夕と同じようであつた。聴衆は場内に満ちた。両夜の主催は庁長の松木茂俊氏である。ところが、松木氏は共進会中で繁忙を極めたために、庶務課長の能勢靖一氏が代わつて接待してくれて、庁属の重藤幹一氏、同じく三原安太郎氏、および山川斉氏が、いろいろ幹旋の労を取られた。また、各宗布教師の助力もあつた。宿所は市街を離れていて、紅塵〔うるさい俗世間〕から遠ざかつていたので、大いに静養の機会を得ることができた。

六日、晴れ。早朝トロ車に乗り、安平街に至つた。安平は、むかしは台南の要港であつたが、港口はしだいに浅くなつて、船舶の出入りが困難なので、自然とその繁盛を打狗にゆずり渡したのは、どうすることもできないことであつた。そして今日なお、むかしの遺物を保存している。すなわち、税関官舎などはオランダ人築造の遺物であるという。会場は公学校で、旧廟内にある。主催は支庁長の池田直太郎氏および税関支署長の竹内寿衛馬氏である。演説後、支庁長の案内で市街を一覧した。港あたりの風景は絶佳〔非常にすぐれていて美しいこと〕である。水上に全部竹で造つた小艇があり、これを竹筏という。本島人で有志家の盧経堂氏は、その子息がわが京北

中学校に在学していると言って、わざわざ訪問されて、竹筏の銀製模型を寄贈された。これより台南に帰り、午後二時の発車で上行して、六時に水堀頭駅に着いた。その時に、旧知の石井常英氏（覆審法院長）に邂逅した。また、旧友の浅田知定氏に迎えられて、氏が経営する東洋製糖会社の社宅に入った。その所在地は南靖庄である。室内は清新で、最も旅鬱を癒やすのに適している。この日の途上吟が一首ある。

探春二月在台南、村外已看農事酣、土呂車過蔗林裏、糖風暖処滿身甘。

〔春の景色をたずね歩き二月の今台南に居る、村外の田園ではすでに農作業が酣たげまわなようすだ、トロ車はサトウキビの林の中を走り過ぎ、暖かい風はサトウキビを吹いてこの身も甘くなるようだ。〕

会社の倶楽部において一席の講話をして、そのうえ浅田氏と三十年前の懐旧談をした。

七日、晴れ。朝、東洋製糖会社を辞して、直通列車で嘉義・台中・新竹などを通過して、桃園街に至った。日はまさに暮れようとしていた。庁長の西美波氏に迎えられて、武徳会演武場に入った。西氏は四、五年前、肥前〔長崎県〕平戸において相識となり、思いがけずここで再会することができた。この地は桃園と呼んでいるが、一株の桃の木もないという。ここから蕃界まで行程九里、トロ車はあるが、時日がないために探検することができなかった。ただ、所感の詩を作った。

文明恩未遍、蕃界血猶腥、早晚皇風度、暗暉照晦冥。

〔文明はまだ台湾すべてに行き渡っていない、未開の人々の血はまだ文明の香りがしない、早晚皇国の風が吹く都度に、晴れ輝

く文明が暗い未開人の社会を照らすようになるだろう。」

台深山処悉生蕃、血雨腥雲鎖富源、願早青天懸白日、使斯蔗類仰皇恩。

〔台湾の山深いところに居るのは皆未開人である、それらの人々が居ることによってせつかくの富の源に手が届かない、願わくはそれらの人々も速やかに青天白日の旗に従い、この豊富なサトウキビにも皇国の文明が届くようにしたいものだ。〕〔この四句を揮毫したものの写真が井上博士揮毫…写真（明治四四年二月一五日）に掲載された。佐藤厚の資料画像参照。〕

八日、晴れ。桃園に滞在。昼間は宿所である演武場において揮毫をして、夜間は公学校に至って講演をした。主催は西庁長である。梅山玄秀氏は台北から来訪された。

九日、晴れ。去月十八日以来、台中と台南を一周して、ここにふたたび台北に帰った。宿所は以前のように日之丸館である。館に着くとすぐに、有志家で同時に成功者である松本真輔氏の求めに応じて、その来歴を詩にして屏風に記した。

鎮西由来出人傑、松本真輔其一人、君曾单身辞郷国、遠遊南溟将尽浜、此時台湾未静定、土匪蜂起苦良民、砲煙彈雨日継夜、当年山河暗戰塵、内訌漸鎮軍政起、乱余人心難和親、或相反目或疑懼、商工不興農不振、天賦富源将枯渴、不知国力何時伸、君以空拳立此際、嘗尽千苦又万辛、率先抛身勤殖産、煙草販路於是新、官賞其功有恩典、実業界中称絶倫、君又深信真宗法、常守二諦俗与真、余慶必当及後代、福寿花開永久春。

〔九州はかねてより傑物を輩出している、松本真輔はその一人である、松本君はかつて单身郷里を出て、遠く南へと旅立ち今にも台湾に上陸しようとした、この時台湾はまだ平定されておらず、土着民の武装集団が蜂起し良民を苦しめていた、砲弾が煙雨

のように昼夜を問わず飛び交い、その年は美しい山河も暗い戦塵に包まれてしまった、内輪もめもようやく収まり軍事政權が起こつたが、戦いは人々の心を混乱させ親睦を結ぶことが難しくなつてしまつた、ある者は反目し合いある者は疑心暗鬼になつてしまひ、商工は興らず農業は振るわず、天賦の富源も枯渇してしまひそうになり、国力はいつになつたら伸びるのか分らないような状況であつた、そのような折に君は空拳を振るつて立ち上がり、さまざまな辛苦を舐めつくし、率先して身を擲つて殖産に励み、煙草の販路を新しく開拓した、役所はその功績を賞して恩札を下賜し、君は実業界の絶倫と称されるようになった、君はまた真宗を深く信じ、常に俗と真の二つの教えを守っている、その幸いは必ずや後代に及ぶに違ひなく、一族に福寿の花は開き永久の春となることだろう。」

午後、曹洞宗別院において講話をした〔この時の演題は「仏教の宇宙觀及び人生觀」であつた。『台湾日日新報』（広告）井上博士講演（明治四四年二月九日）。同院布教師は大石堅童氏である。

十日、晴れ。午前、井村庁長、本田茂吉氏、矢田由次郎氏、梅山玄秀氏、小山祐全氏、花車円瑞氏など十余名とともに、植物園内において撮影して〔この時の写真が残っている。佐藤厚の資料画像参照〕、帰路、中学校を參觀した。校長の本莊太一郎氏は上京中で不在であつた。午後、大谷派本願寺別院において講演をした〔この時の演題は「勸語と仏教」であつた。『台湾日日新報』井上博士講演（明治四四年二月一〇日）。別院主任は長等珠琴氏である。両日の開会台湾仏教会の主権による。翌日の紀元節には、本島人の断髮会の発会式なので、一言の祝辞を寄せてほしいとの勧めに応じて、一詩を記してこれに贈つた。

今時猶守旧時俗、誰使斯民皇沢浴、一片婆心動不休、願先断髮禁纏足。

〔台湾の人々は今なお昔のままの風俗を守っているかのようだ、誰かこの人たちに皇國の近代的な文明の恩沢を与えてやらなけ

ればいけない、心の中に老婆心が浮かんで消えることがない、願わくはまず辮髪を切つて纏足を禁ずるべきだ。」

要するに私の意見は、断髪を行うよりも、纏足を禁じる方が一層急務であるということにある。なんとすれば、断髪は人俗であつて、纏足は天刑であるからである。孔子の言葉に「身体髮膚これを父母に受く。あえて毀傷せざるは孝の始めなり」とあるのを見て、纏足は父母に対しての不孝であるということができそうである。また、台北に客中の画師の西郷孤月氏と、同館に宿泊した縁故をもつて、幽霊の図を求めたところ、速やかに男子の幽霊を描いて示された。そこで、一詩を作つてこれに答謝した。思うに男子の幽霊は、孤月の筆をもつて嚆矢〔最初〕とする〔円了と西郷孤月との交流については「台湾日日新報」二日の丸館の幽霊、幽霊博士と朦朧伯（明治四四年一月一八日）に記されている。また西郷が描き円了が讚を記したものが日ノ丸館に所蔵されており、それが羽賀銀松「高砂文雅集」（大正六年）に収録されている。なお佐藤厚の資料画像に挙げておいた。〕。

台北初逢情最温、曾聞孤月画名喧、君能為我揮神手、開得幽靈新紀元。

〔台北の宿で初めて出会いこの上ない友情が生まれた、かつてこの幽霊画で有名な（西郷）孤月という人の名が喧伝されているのを聞いたことがある、孤月氏が私の求めに応じて見事な幽霊の絵を描いてくれた、これで幽霊の新しい紀元が得られたというものだ。〕

台北滞在中、山下江村氏、山本鎮三郎氏および三浦重次氏も、大いに奔走の勞を取られた。

十一日（紀元節）、晴れ。天気は清朗かつ温暖で、良い祝日である。この佳辰〔めでたい日〕に当たつて、台北の諸友と訣別して、淡水港すなわち滬尾街に向かった。蕃務総長の天津麟平氏の見送りに感謝した。車中から蕃山

の積雪を遠望した。淡水の休泊所は布施税関事務官官邸で、山河を眼下に控えて、その眺望は実に春眠を覚まされるほどであった。すぐに一作を得た。

港上春風払曉煙、望中迎送去來船、窓前又見芙蓉影、兩朶倒懸淡水天。

〔港の春風夜明けの煙、行き来する船の出入りが見えている、窓の外には小さな富士山のような山陰が見える、山の左右の稜線が斜めになって淡水の空に懸かっているかのようだ。〕

淡水は近ごろ次第に衰運に傾いているが、なお対岸の中国貿易の要港であることを失わない。河を隔てて観音山がある。そのそばに淡水富士と呼ばれている小富士山がある。観音山はこれに比べれば、大富士山の形をしている。ゆえに、これを詩中に入れた。会場は公会堂であって、主催は支庁長の小笠原長根氏、公学校長の後藤吉人氏、小学校長の八幡庄蔵氏である。そして、後藤氏は哲学館出身である。

十二日（日曜）、晴れ。淡水を出発して、台北を経て基隆に着いた。服部針夫氏、高橋行信氏に会った。ここからさらに竹輿たけこし（竹を編んでつくった輿こし）に乗って山行三里、瑞芳に至った。ときどき驟雨しゅうう（にわかあめ）があった。苗栗以来二十四、五日目で、初めて雨にあった。支庁で少憩して、さらに行くこと一里、険しい坂を上下して九份庄金瓜石の田中組鉦山に至った。瑞芳支庁長の石川文次郎氏も同行された。宿所は鉦山の客室、会場は集会所である。夜に入って開会した。職員のみならず工夫も共に集まり。聴衆六百名の多数に及んだ。その発起は田中組事務所で、所長の小松仁三郎氏などの尽力があった。この地方は炭山や金鉦に富んでいて、土地はみな富源といわないわけにはいかない。

米田連蔗圃、金鉢接茶園、宝庫藏無尽、台湾我富源。

〔稲田がサトウキビ畑に連なり、金鉢山が茶畑に接している、宝は台湾という蔵に無尽にある、本当にこの台湾は我が皇国の富の源だ。〕

十三日、晴れ。ただし風が強い。未明に金瓜石を出発して、かごかき三人が一つのかごを担い、三貂嶺の険峻〔高くて険しい山〕をよじのぼり、急行して頂双溪に着き、支庁内で少憩した。宜蘭から有志総代として、寺本仙太郎氏が出て迎えられた。ここから草の峰をこえて大里間に出た。途中に渡し船があつた。峰の頂の眺望は非常に壮快を覚えた。この日は陰暦の十五日に当たるということで、土人は一般に休みで、廟にお参りをし、至る所で爆竹を鳴らし、竹紙を焼くのを見た。この辺りの民家は、すべて茅屋が土壁あるいは竹壁であつて、汽車の線路に沿っている地方とは、大いに文化の度を異にしているような様子がある。台湾には土を固めて日光に晒して、これを積んで壁を造り、煉瓦に代用するものがあるが、この地方では石を積んで、その間に土を塗ったものが多い。大里間の茶亭で昼食をとり、さらに海岸に沿って、亀山島を左に望みながら頭圀駅に至つた。途中に林投樹が多かつた。

雨歇暁天晴色分、山深只有水声聞、宜蘭一路昇夫健、較緊荷輿攀白雲。

〔雨が止んで明け方の曇った空に青空が広がり始めている、ここは山深く水の流れる音が聞こえるだけで、宜蘭へと輿を担いでいる役夫は健康そのもので、輿はどんとんと白雲目指して山を登っていく。〕

一湾晴色帯春暉、轎上輕風払客衣、半日林投樹間道、濤声送夢入頭圀。

「灣は晴れて海面は春の輝きを湛えている、トロ車を吹き過ぎる軽い風は乗っている者の衣をなびかせる、半日タコノキの木々の間の道を行く、波の音が夢を誘う頃頭囲の街に入った。」

土人語で、迅速を較緊ガツキン「イライラしながら「速く」という。頭囲から宜蘭までの四里の間は、トロ車があった。土人は車に棹さおをさして「棹でこぐようにして」走る。また、めずらしいことである。

山遥田闊路漫漫、風歇雲開眼界寬、竹影不揺斜照穩、棹車較緊到宜蘭。

「山は遥かに田は広々として道は長く遠い、風は止んで雲が晴れ視界が開けた、竹は揺らぐこともなく斜めに射す日の光は穩やかに、棹で漕ぐトロ車は早くも宜蘭に着いた。」

四里の間を、わずかに一時間十五分で達した。「トロに乗りトロトロと眠る間に、もはや宜蘭の宿に着きけり。」多数の有志諸氏に迎えられて旅館杉崎屋に入った。この日の行程は十六里であった。たまたま満月であった。春の空は洗ったように晴れて、一点の雲影をも見なかった。異郷にあつて中秋の月を望む心地がして、壮絶また快絶であった。市外は平田が数里に連なり、まだ挿秧の時期に達していないのだが、二月中旬、月下に蛙の声を聞くのも、また別天地の趣があつた。

草嶺山南夕、風光動旅情、客庭春已滿、暖月照蛙声。

「草嶺山の南時間はもう夕刻で、景色は旅情を醸し出してくれる、旅館の庭には既に春の空氣が満ちており、暖かな空氣の中秋

の月明かりに蛙が鳴いている。」

十四日、快晴。朝気はやや冷えを覚えた。軒前はるかに、蕃界の連山が雪を頂いて白々としているのを望んだ。午後および夜間、宜蘭俱樂部において開演した〔井上博士講演会（明治四四年二月一六日）午後二時から愛国婦人会員のため「教育談」を講演し、聴衆約三百余名。午後七時から一般公衆のため「戊申詔勅の大意」と「妖怪談」の二題を講演し午後十時終了散会。聴衆五百名を超えたという。〕。その中に公会堂の設備があつて、五、六百人の聴衆を入れてもなお余地があつた。夕刻、市街を通覧した。夜中、月がまた良い。開会主催は庁長の小松吉久氏で、佐藤徳治氏、二宮卯一氏も首唱者に加わつた。庶務課長の渡辺発蔵氏、警務課長の金子恵教氏、財務課長の松浦石太郎氏、庁属の大岡円助氏なども、みな助力があつた。

十五日、曇り。午前、トロ車で羅東街に移つて開会した。中間に濁水溪があり、これに架けた橋を凱旋橋といふ。雨が次第に強くなつた。

軽車一棹客身安、不覚羅東行路難、濁水溪頭春雨冷、凱旋橋畔曉風寒。

〔トロ車は安定して軽やかに進み、悪いと言われている羅東の道もあまり揺れを感じなかつた、濁水溪に降る春の雨は冷たく、凱旋橋に吹く朝風は寒かつた。〕

午後、公学校で開会した。製脳家〔樟脳をつくる〕の波江野吉太郎氏の主催である。支庁長の田丸直之氏がこれを助けた。日がまさに暮れようとするとき、宜蘭に帰館した。この夕べ、小松庁長の招待に応じて、官邸に至つ

て台湾料理の饗応を受けた。美穀びこく「おいしい酒のさかな」や珍味が十四、五種の多数に及んだ。渡台以来、台湾料理はこれを初回とする。食後、庁長秘蔵の珍しい軸物を一覽して帰宿した。

十六日、雨。未明に宜蘭を辞して、頭囲から轎かぶに乗って、峰の上をよじのぼった。全身に寒冷を覚えた。午後二時半に頂双溪に着いて、支庁で午餐ごさん「昼食」を食べた。支庁長は鈴木長一郎氏である。寺本氏は宜蘭から我が行を送ってここに至り、ここからさらに轎を換えて、高い峰を上下して瑞芳に入った。夜のやみは視界がきかず、近くのもの見分けがつかないほどであった。そこで松明たいまつを点火して、風雨を冒して険しい坂を下った。これまた旅中の一興であって、非常に勇壮を覚えた。煥仔寮庄の藤田組の鉦山俱樂部に着いたときは、すでに八時を過ぎていた。これより入浴と食事をして、少しばかりの旅の疲れを癒やして演壇に上がっても、なおも轎にゆられる心地がした。演説が終わると、時報はちょうど十一時を報じた。渡台以来、約四十日に及ぶうちに、全く蚊帳かやを用いなかったのは、当地と金瓜石と、その他一、二か所があっただけである。

十七日、雨。午前は休養、ただ揮毫をしただけである。当所の取締の上田徹氏が、他の事務員とともに斡旋された。そして、両鉦山の開会に關しては、瑞芳支庁長の石川氏の尽力が少なくなかった。午後四時に俱樂部を出発して、山行三里、六時に基隆の富貴閣に着いた。轎に乗って一作を試みた。

台北連山鉦脈長、深溪無処不工場、何知地底三千尺、猶有富源無尽藏。

〔台湾の連山の鉦脈は長く続いて、深い谷川には至る所に鉦山の工場がある、誰も知らないような地底三千尺には、まだまだ富の源が無尽蔵に眠っている。〕

その夕べ、基隆旅館において、郵船会社出張所長の高柳敬勇氏、服部鈿夫氏、宮崎、山下などの諸氏とともに会食した。

十八日、雨。午前、兵營に至つて講話をした。主催は砲兵大隊長の角徳市氏である。午後三時、郵船讚岐丸に乗つて帰航に就いた。

ここに、台湾に別れを告げるに当たつて、大いに謝意を述べないわけにはいかない。台湾に渡つてから三十八日の間に、二十街七庄を巡遊して、各所において官民諸氏から、格外の優遇と多大の友情を頂いたのは、深く感謝するところである。永くその好意を心に深く刻みつけて、忘れないでいることを心に決めた。実に台湾は宝庫であり、金窟であり、富源であり、福池である。今後、生蕃（せいばん）教化に服さない異民族がごとく帰順するようになれば、今日に数倍する福利があるだろうことは、だれも疑わないところである。ただ教育上の問題は、いかにして従来の台湾人を日本に同化させて、我が同胞とともに尊皇忠君の心を起こさせることができるかどうかにある。これはまことに難問である。生蕃を帰順させるのはやさしく、島民を同化するのは難しい。島民は家あるを知つて、国あるを知らず、父母あるを知つて、君主あるを知らず、孝道あるを知つて、忠節あるを知らず、利己あるを知つて、利他あるを知らず。これはすでに彼らの天性となるもので、とうてい一朝一夕にして同化の功を達成することはできず、必ずや数十代、数百年の歳月を要するであろう。

そして、その方法は学校教育が最も有効であるが、その力だけで十分にするにはできず、あるいは美術の方面から、あるいは宗教の方面から、次第に少しずつ教え導くことを要する。ここに社会教育の一手段として、各都会に従来設置してある文武両廟を再興して、文廟には孔子のそばに菅公〔菅原道真〕を祭らせて、武廟には関帝〔関羽〕のそばに〔加藤〕清正公を祭らせるのもよろしかろう。ことに必要なのは、彼らの宗教を改良することにあ

る。人はみな言う、「本島人は宗教に冷淡なり」と。私は、そうではないことを知っている。ただ知識の程度が低いために、その固有の宗教心が、迷信の形となって発現しているだけなのだ。ゆえに、もしこれを善導するに至れば、正道に赴かせることは難しくないのであろう。現在、彼らの迷信を利用して生活しているものに、法師、道士、生き仏、僧侶、タンキキ 乩童〔靈媒師〕の数種があるが、みな我が内地の無知識な修験者、みこ 巫女、ぼくしや 卜者の類だけである。しかしながら、多数のこれらの仲間がよく生活しているのを見ても、また祠堂や祖廟の多いこと、観音や媽祖への信念の深いこと、家ごとに正庁を設けて祖先を祭祀する心の厚いことを見ても、その根底に宗教心をはらんでいることを知るのに足りる。

ゆえに、今から彼らの寺院や僧侶に制裁を加えて、衆人が参集する場合には必ず講話をさせて、あるいは御詔勅を奉読して、土地の言葉でその一端を解説させることを要する。もし、かの僧を変化させてこれに至らせる望みがないとすれば、かの寺院内には必ず内地の布教師を置くこととし、これに多少の俸給を与えて、その職を尽くさせるのがよい。これと同時に、公学校以上の教育を寺院内に設けて、教師にこれを兼ねさせるのがよい。もし、あるいはその論は言うべくして行い難しとすれば、これに達する階梯として、法師、道士、生き仏、僧侶、乩童となって衣食するものは、必ず公学校卒業以上のものに限るという制裁を設けるのもよからう。とにかく宗教は、民間の風俗・習慣・儀式を支配し、社会教育、家庭教育に関連して、そのうえ人の精神の慰安を引き受けるものなので、その改良は人民を同化するのに、偉大な効力があるのは疑いがない。

さらに他方面から考えれば、彼らの迷信を利用して、自然に化導けどう（衆生を仏道へ教え導くこと）する道があるはずである。すでに生蕃に対しては、迷信を利用して大いに成功したことがあると聞いている。あるいは、内地から彼らの信仰に適応する宗教を、各所に持ち入れるのも一策である。例えば観音のごとき、彼我ともに多数が帰依きえ（神

や仏などすぐれた者に服従し、すぐること」するものであるから、内地の観音堂を各所に設けることもよいであろう。また、内地にも現世の利益だけを説き、もっぱら息災・延命を祈るだけの宗門があるので、これをして彼らを化導する任に当たらせるのもよいであろう。また、台湾人は儒教崇拜なので、聖廟を保存し、積奠〔孔子をまつる典礼〕を行うなどに、なるべく便宜を与えて、御詔勅を敷衍する〔わかりやすく言い換えたり詳しく説明したりする〕ためにも、四書五経を引用するようにするのも、もとより必要である。

台湾の教育に関しては、私が一言をはさむ余地がないほどに行き届いているので、ここに評論しない。ただ、宗教方面は一般から度外視されて、官民ともにその方に気持ちを注がないように見てとれたので、所感のまま書き記すだけである。しかしながら、複雑な台湾社会を、私がわずか数週間にあわただしく走りまわった旅行で一瞥したにすぎないので、あるいはその説が、盲人が黒白を話すのに似ているかどうかは、世の中の公平な批評に任せる。ただ、世の中の風俗を変えるのは、宗教よりすぐれたものではなく、人情を動かし民心を感じさせるのは、宗教より好都合なものはない。これは私が日ごろ信じているところなので、その所信の上から観察した管見〔せまい考え〕を述べたのにほかならない。終わりに際して、今回の巡回に総督府が懇切な紹介の榮を担ったことと、各庁の周到な配意を頂いたことは、ともに深く敬謝するところである。

台湾での旅行中、めずらしく思い、奇異に感じた諸点も、ここに列挙しようと思う。第一は、全島を南北に分して、全く雨期を異にすること。すなわち、一半が雨期であるときは、他半は晴期であること。第二は、市街に亭仔脚〔アーケードのようなもの〕と称するもの、すなわち店の前に二階付きの廂〔みせ〕があつて、下方は人の往来する所となり、上方〔階上〕は居室となること。第三は、市中に城壁がなくて、城門だけが孤立すること。第四は、屋根瓦が薄くて煎餅に似ていること。第五は、汽車に一等と三等とがあつて二等がないこと。第六は、夜中に室

内でヤモリの鳴き声を聞くこと。第七は、庭園に狸シノカシヨウ々木と名づけた異様な植物があつて、木の梢に花にも劣らないような紅葉を有すること。第八は、竹にトゲがあること。第九は、竹屋、竹壁、竹柱、竹床、竹戸、竹橋、竹筏、竹輿、竹荷（竹で作った天秤棒）など、竹作りのものが多いこと。第九は、キセルの長さが三尺もあるものを、獵夫リョウフ（かりゅうど）が銃を負うように、背の上に斜めに負うこと。そして、その全部が竹でできていること。第十は、トロ車が各方面に広まっついて、これを走らすのに帆または棹を用いること。第十一は、水牛の背の上に鳥がとまって戯れていること。また、牛車の響きが自然に音楽の調子になっていること。第十二は、役名に蕃務、埤圳、保正などの、聞き慣れない名目があること。第十三は、台湾銀行で発行する紙幣である。その形は今から三、四十年前に、内地で通用したものに似ている。その他、本島人の風俗に関することは、いちいち列挙するに違い（時間）がない。最後に、私が台湾を詠んだ狂歌一首を掲げよう。

タイワンに高く盛りたる白飯は、新高山の雪とこそ知れ。

讃岐丸は午後四時に抜錨（出航）して、海門を出て東に向かい、逆風や激波に逆らつて進行した。総督府医学校長の高木友枝氏と同船であつた。

十九日（日曜）、終日曇天。風波が高くて船は動揺し、客の中で船病（船酔い）にかかるとが多かつた。

二十日、曇り。天候は前日と同じようである。ただ船中のほかの楽しみは、無線電信の報告を集めて印刷した新聞を読むことだけである。航海中の一作がある。

海天渺漠望難分、風浪躍船人病醺、幸有電音伝遠信、客牀横臥聞新聞。

〔海も空も広々と広がって境目が分からない、風や波が船を躍らせ人々は船酔いに罹かかつている、幸いにも電信が鳴つて遠くから

ニュースが伝えられてきたので、ベッドに横になったまま新聞を見た。」

二十一日、晴れ。午後一時に門司に入港した。ここから馬関〔下関〕に上陸して、二時四十分発で東行し、海田市から転乗して、夜十一時に呉市に着いた。中学校長の宮本正貫氏の案内を得て、貴族院議員の沢原俊雄氏の宅に宿泊した。主人は議会のために在京中なので、沢原精一氏が代わって接待された。

二十二日、曇り。午後、明法寺で開演した。呉市教育会の主催による。会長は沢原氏、副会長は宮本氏である。二十三日、曇り。風はないが大気は寒かった。昨夜以来、山上に雪が降ったのを見た。午後、西教寺説教所において開会した。主催は前日と同じである。夜に入って、明法寺において開演した。呉仏教青年会の発起による。佐々木吾八氏、勝豊吉氏、熊橋朝一氏、岡本善助氏などが、その幹事である。当夜の聴衆は、堂にあふれて庭にまで及んだ。約一千五百人と目算された。沢原氏大人（名は為綱）は、別に草庵の下に隠棲し、謡曲と囲碁を老後の逸楽〔楽しみ〕として、閑日月〔ひまな時〕を送っている。私は一詩を作って進呈した。

偶訪仁人宅、老来氣未衰、閑居多樂事、謡曲与囲碁。

〔たまたま仁者である人の家を訪れた、歳は老いても気力はまだ衰えることはない、閑居には楽しいことがたくさんある、氏の楽しみは謡曲と囲碁だ。〕

その宅は庭の前に、一つの小さな池と一株の梅の木があつて、すこぶる閑雅幽趣〔静かで、風流な、奥ゆかしい趣〕があつた。ここに、当市開会は全く沢原、宮本両氏の厚意によつたことを深謝する。

二十四日、曇り。早朝に呉を出発し、岡山駅で一休みして、さらに中国線に乗り移って、津山に着いたときは、すでに夜の九時であった。これよりさらにさらに腕車〔人力車〕を走らせて、苫田郡寺元駅の旅館対泉楼に泊り宿した。時に十一時であった。

二十五日、晴れ。午前、大野村吉祥寺で休憩して、午後、小学校で開演した。主催は村長の金田正志氏、吉祥寺住職の中村道栄氏、小学校長の日笠平吉氏などで、両氏〔誰か不明〕の尽力が最も多かった。

二十六日、曇り。早朝、寺元旅館を出発して、津山駅で乗車した。坪井貞純氏が迎え、そして送られた。車中は春寒料峭〔春風が肌に寒く感じられること〕を覚えた。

探春深峡中、一路鉄車通、備水風猶冷、作山雪未融。

〔春深い谷川の中、鉄道は一筋続いている、谷川に風は吹いているがまだ冷たく、作陽の山の雪はまだ融けていない。〕

岡山駅で中野堅照氏と杖を分かち〔別れて〕、急行列車で東に上った。二十七日午前十一時、無事帰宅した。

台湾開会一覽表

序	町村	会場	席数	聴衆	主催
台北序	台北街	小学校	一席	千二百人	台湾教育会
同	同	国語学校	一席	千人	東洋協会支部
同	同	病院	一席	百人	諸婦人会

嘉義庁	嘉義街	公学校	四席	八百人	官民有志
同	同	布教所	一席	百五十人	仏教婦人会
同	斗六街	公学技	二席	二百五十人	支庁長
同	五間曆庄	工場	二席	百七十人	製糖会社
同	新宮庄	俱樂部	一席	百人	製糖会社
同	南靖庄	俱樂部	一席	五十人	製糖会社
台南庁	台南街	会館	三席	六百人	庁長
同	安平街	公学校	一席	二百人	庁長および税関
同	打狗街	布教所	二席	五百人	支庁長および有志
同	鳳山街	公館	二席	六百人	支庁長
阿緞庁	阿緞街	劇場	二席	五百人	官民有志
同	蕃薯寮街	演武場	二席	三百人	官民有志

以上合計、九庁二十七町村（二十街七庄）、三十三か所、五十七席、聴衆一万二千八百七十人、日数三十八日間。

演題類別

- 一、詔勅および修身に関するもの 三十席
- 二、妖怪迷信に関するもの 九席
- 三、哲学および宗教に関するもの 八席
- 四、教育に関するもの 六席

五、実業に関するもの 三席
六、雑題に属するもの 一席

附帰路山陽道開会

広島県 呉市 寺院 四席 一千人 市教育会
同 同 寺院 一席 一千五百人 仏教青年会
岡山県 苫田郡大野村 小学校 二席 三百人 村内有志
右合計、一市一村、三か所七席、聴衆二千八百人

演題類別

詔勅および修身 三席
妖怪迷信 一席
哲学宗教 二席
実業 一席